

2025年度 公立大学法人北九州市立大学特別研究推進費 実績報告書

2026年4月30日

北九州市立大学長 様

(所属・職名) 文学部・教授
(氏名) 岩松文代

公立大学法人北九州市立大学特別研究推進費に係る研究実績について、次の通り報告します。

研究課題名	自然資源循環型キャンパスの実現に向けた主体形成の実践的研究 —樹木の保全対策・利活用に着目して—		
交付額			
共同研究者	所属・職名	氏名	役割分担等
	外国語学部・教授	大平 剛	<ul style="list-style-type: none"> ・ 定例研究会での協議 ・ 担当部局との協議 ・ 外部講師の調整、議論 ・ 樹木資源の利活用実践 ・ 学生活動の運営と協同
	法学部・教授	石松一仁	<ul style="list-style-type: none"> ・ 定例研究会での協議 ・ 担当部局との協議 ・ 外部講師の調整、議論

1. 研究の目的

本学北方キャンパスの敷地内では、創立前からと思われる長い年数を経てきた巨樹を含めて、多くの老樹が今日まで継承され、巨樹・老樹による象徴的なキャンパス景観を呈する一方、狭小な敷地や建物との位置関係などによって、樹木の根周りに発生してきた路面の崩れと狭い根周りに伴う樹木の水分不足や、一部樹木に樹勢の劣化もみられ、対処の必要があった。大学敷地内で、緑地や樹木の有する代表的な役割である快適な空間利用、美的景観、防災機能、生態系の保全、歴史継承、大学らしい樹木空間の効果を発揮するためには、生き物である樹木の健全な生育がなくてはならない。しかしながら、これまでは、こうした現状の課題に対処する際の各関係者への周知や合意形成にかかる人的な対応、また資源の保全方向や行動指針など、多様な関係主体の参加による自然資源の管理を検討するしくみや計画が整っていなかった。そこで本研究では、本学キャンパスの樹木の保全・利活用の実践を通して、そこに関わりうる大学内外の様々な関係主体の連携の実践をもとに、有効な主体形成のあり方や課題を明らかにし、本学が有する自然資源を有効に活用できる循環型キャンパスの展望を示すことを目的とした。

2. 研究の方法

本研究では、できるだけ多様な関係主体との話し合いや、担当部局との具体的な協議を行い、また、本学産木材の木製品の製作を通して外部機関との協同の経験を蓄積することから、自然資源の保全と利活用のしくみづくりそのものを方法として実践し、考察を行った。

個別の研究方法は、以下の研究成果ごとに示す。

3. 研究成果

■資源の保全や循環のための関係主体の協議と、その拡大

学内の自然資源の保全や循環を目指し、利活用を含めた管理方法を検討するために、担当部局との協議を進めた。急がれる樹木対策を提案し、伐採樹木の活用のほか、緑地に関わる多様な話題を協議し、剪定等の作業への立ち会いも行った。また九州工業大学の学内の樹木への取り組み事例も参考にして、本学におけるリスク管理や伐採樹木の利活用への方向を話し合った。

さらに、誰でも参加できる話し合いイベントを設定し、2025年4月～12月の間に15回開催した。時には、保全方法を問いかけたり、樹木の現状説明会とした場合もあり、メールでの意見収集や管理状況の周知も重視した。このイベントは、担当部局との橋渡しとなった。このような意見を出せる窓口を継続して設置してきたことが、多くの関係者に知られていることも一定の効果と考えられる。

■北九大樹木文化研究会の活動実施と役割の考察

本学の樹木管理についての担当部局との意見交換は、前年度（2024年度特別研究推進費）から始まり、今年度は、さらに教員の有志からなる北九大樹木文化研究会（樹木研）を設置した。この研究会は、本研究の申請時（2024年11月）ごろから共同研究者とともに立ち上がっており、2025年度の本研究では、学内の樹木など緑地環境の管理について担当部局と意見交換をする仕組みとしてスムーズに機能するようになった。参加する教員は多様な専門からなり、専門分野を活かした知識の助言も得られた。このように、まずは有志の教員によって樹木研のあり方や役割について検討しており、今後の学内における合意形成や協議のあり方を考え、進める上での初期段階の組織活動になっていると考えられる。

加えて、樹木研の活動の広報に資するイメージ絵画を作成し、樹木保全活動の学内外への周知や、さらに多くの関係主体による樹木管理への注目や合意形成への参加を促していくための準備を行った。

■授業による教育への貢献

文学部と副専攻環境ESDプログラムの対象科目「環境学概論」では、学内の樹木管理について説明するとともに学生達の意見を募った。さらに同科目では、鳥取大学日置佳之名誉教授に「大学キャンパスの樹木管理」と題して、鳥取大学湖山キャンパスで教員と学生達の行ってきた参加型管理の実践について講演していただき、受講生達との活発な質疑応答が行われた。また、基盤教育センター科目「環境特講B 現代社会とエシカル消費」では、高倉環境研究所の高倉弘二所長に講演いただき、資源を有効活用するコンポストの国際発信や、日本の資源循環型社会のあり方にも話題を広げていただいた。これらの講演は、自然資源に関わり自ら行動できるという認識や、問題意識の獲得に非常に有益であった。

■伐採樹木（マキ）や剪定枝（クス）の利活用

前年度（2024年11月）に本学図書館北側で伐採され、一次製材を行い1年間ほど自然乾燥されていたマキ材（巨木、大木含む6部位）を用いて、本研究では木製品の製作に向けて、2025年9月からKiTAQWOODと本学の学生活動（もったいないプロジェクト）も加わって協同作業を開始した。その結果、学内のロビーや休憩スペースにおくベンチ6基（半割ベンチ、板材ベンチ）、案内看板、時計、年輪標本、傘マーカールのほか、コースター、スマホスタンドなどの大学オリジナルグッズを製作した。これらの製品に対する学生や教職員にとっての使用感、学内樹木や学内産木製品への意識を、今後の資源循環や新たな木製品製作に向けた基礎資料に役立てていく。そして、伐採樹木を経済価値のみならず、循環させることの価値を持つ製品にする可能性を検討した。今後は、生み出された経済的な価値が、樹木管理に還元できる方法を検討することも求められる。そして、2026年に創立80周年を迎える本学で、歴史をともにしてきた古樹を用いた木製品を記念品に展開させられるかも検討された。

さらに、学内に立ち並ぶ高木の剪定によって発生した剪定枝（丸太ほどの大きさ）のまとまった量を保管し、野菜畑（もったいないガーデン）の柵に用い、また小さな空地に配置して草本の生育する緑地の雰囲気にするなど、大学内において植物のある景観形成にも役立てている。

木製品の実務をささえていただいたKiTAQWOODとの協同は、大学と連携した初の木製品となり、市内産木材の利用への貢献や、林業行政へのモデル的な活用の提案をすることができたと考えている。

■シンボルツリー（ヤマモモ）の管理への参加と考察

学内の敷地であって、関係者の意識や関わりから本学のシンボルツリーであることが指摘できる中庭のヤマモモは、前年度（2024年度特別研究推進費）に行った樹木医による基礎的な診断結果等をふまえて、人間側にとってのリスク回避のために樹木の周囲に広く柵がもうけられ、人々が近くに寄れない状態となっていた。そこで、ヤマモモの管理方策についても担当部局ほか各種関係主体との協議や、「環境学概論」受講生へのアンケート調査や話し合いイベントによって検討し、第71回環境社会学会大会にて「古木の残存から保存への認識の転換と管理方法の模索 ―大学敷地のシンボルツリーをめぐる―」、岩松文代（部会D「自然と社会をつなぐ経験と認識」）の発表にて、残った樹木が保存する樹木へと移行する認識を「古木化社会」の概念を提起して考察した（2025年6月22日）。また樹木側の立場にも立って健全な生育のための良い方法について、治療方法や管理方法を担当部局、造園業者、樹木医と相談して複数のパターンを詳細に話し合った。その結果、ヤマモモの管理方策が決定され、2025年10月に樹木の治療（株立のうち枯れた幹や枝の伐採、樹勢の固定化、周囲での支柱設置）や剪定等が行われたことによって、柵が撤去され、シンボルツリーの機能が変化した。こうした選択と決定を実践し、第72回環境社会学会大会にて「大学キャンパスのシンボルツリーの機能発揮と価値醸成 ―古木の保存と管理方法の決定が示すこと―」、岩松文代（部会B「自然資源の認識と利用」）として、樹木の管理方法と保存理念との関係性に注目したうえで、シンボルツリーの機能発揮と価値醸成への結びつきについて考察し、発表を行った（2025年12月6日）。当該シンボルツリー周辺の今後の利用空間づくりに向けて、こうした考察結果は管理方針の背景としての役割を果たすことが期待される。

以上のように、新しい樹木保全のしくみづくりに向かい、実践することによって、考察を進めてきた。